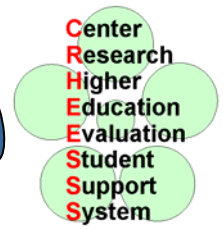


週刊センターニュース No.178



第178号(2007年10月15日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第161回共同学習会のご案内 ○●○

日時: 2007年10月18日(木) 16時30分~18時

場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

報告者: 鈴木 健一(保健管理センター)、青野 透(大学教育開発・支援センター)

テーマ: FD義務化と学生支援・学生相談

趣旨: まず、鈴木准教授より、9月20日(木)神戸市で開催された大学コンソーシアムひょうご神戸主催第2回FD・SDセミナー「“多様化”時代の高等教育」における分科会「学生のメンタルケアと大学の対応」の参加報告が行われる。その後、青野が、今次の設置基準改正によるFD義務化が学生支援にも重要な改革を迫るものであることを、『広中レポート』への振り返りを含めて報告する。第160回の「大学設置基準改正とFD義務化」に続く、FD研究・実践開発シリーズの第3回目となる。今回もFDの今後のあり方をめぐり、参加者とともに議論したい。

なお、両報告は、青野を研究代表者とする科学研究費補助金を得ての研究「大学評価指標における『学生支援』の位置づけに関する実証的研究」の成果報告の一部をなすものである。

○●○ 第4回専門分野別教育開発セミナー開催のご案内 ○●○

日時: 11月11日(日) 13:30~17:45

場所: 金沢大学サテライトプラザ3階集会室

http://www.adm.kanazawa-u.ac.jp/ad_koho/satellite/

テーマ: 「大学における専門英語教育~理系を中心に~」

プログラム

第1部 講演

13:35~ 講演1「大学の専門教育と英語力強化問題-国際競争力との関連で-」

田中 慎也(日本ESP協会会長代行, 元桜美林大学言語教育研究所所長, 日本言語政策学会会長)

14:25~ 講演2「ESP*からEGP**へ: 専門英語の手法で一般英語も上達!」

Judy Noguchi(武庫川女子大学薬学部教授)

第2部 シンポジウム「一般英語教育と専門英語教育を繋ぐには」

15:35~ 報告1「人間・機械工学科「機械技術英語」について」

渡邊 明敏(金沢大学外国語教育研究センター教授)

15:55~ 報告2「Good Listening Comprehension and Poor Verbal Communication Skill」

Junko Okumura, PhD, MPH(金沢大学大学院自然科学研究科准教授)

16:15~ 議論 司会 西山 宣昭(金沢大学大学教育開発・支援センター教授)

【申込み・問い合わせ】

金沢大学大学教育開発・支援センター 西山 宣昭

TEL: 076-264-5862 FAX: 076-234-4172 E-mail: nnishiya@ge.kanazawa-u.ac.jp

※詳細は、<http://www.kanazawa-u.ac.jp/events/07/1111.html> をご覧下さい。

○●○ 法政大学 2007 年度第 1 回 FD フォーラム参加報告 ○●○

10 月 6 日（土）、法政大学市ヶ谷キャンパスにて開催されたフォーラム「法政大学 F D の現状と課題を考える」に参加した。センターニュース 174 号及び 175 号で、「全国大学教育研究センター等協議会」に関連して、主要な国立大学における F D 活動の状況と課題について報告したが、今回は一私立大学における教育改善活動に少し触れてみたいと思う。

第一部では、大学院・学部 F D 義務化を目前にして、法政大学における近年の F D 活動がどれほど浸透して、課題はどこにあるのか、F D 推進センターが各部署（対象者は各教学単位の執行部や F D 委員会責任者など）に対してヒアリング（2007 年 7 月、9 月）を行っておりその中間報告をベースとしている。学内でどのような組織的な取組、また教員個人ベースでも積極的な取組が行われているか、情報の掘り起こしと、F D 義務化への自覚が教学単位間、教員間によって温度差が大きく、啓発していくこともその大きな狙いであるようである。

川上忠重氏（施策開発プロジェクト・リーダー、工学部教授）による結果報告の中では、文学部心理学科で学部学生が「ピアサポータ」を組織し、勉強会等の要望を集約するなど教員との情報交換を蜜にしていること、政治学研究科での徹底的なオリエンテーション、社会学部において教員・学生共同企画・実施のイベント、教員懇談会や教員・学生懇談会（こちらは検討中）により、教員学生間が日常的に対話し、ニーズを把握し、コミュニケーションを図っていること、キャリアデザイン学部で、年度初めに教職員 F D 合宿（参加者は、全教員＋キャリア（相談）アドバイザー＋学部事務主任）を行い、学部全体の課題の洗い出しは対応方法について集中的に議論していること、文学部心理学科で学生による授業評価アンケート結果に対し、教員に「気づき」を文書化してもらい、それを学生に公開していることなど、同学部史学科が拠点（空間的に）ワンフロアに集結させ、教員と学生が身近に接する機会を増やす（一教員当りの学生数が不可避免的に大きい私立大では重要な問題である）、などの事例が興味深い取組として挙げられた。一方課題として、F D 義務化の事実を適切に理解している組織が少なく、トップダウンで厄介なことを言われているとの認識で止まる組織もあったこと、授業評価アンケートについて全般的にやりっぱなし、教員の自覚に任せるという状況で、積極的な運用の提案が求められること、大学院での G P A 導入運用に対し（例えば、少人数だからという理由で）消極的で、大学院でも成績評価基準を明確化することが重要であること、などが指摘された。

第二部では、学部による F D への取り組み報告として、上記の聞き取りでも明らかになっているように、学内でとくに改善活動に積極的な社会学部（田中優子教授）とキャリアデザイン学部（小林ふみ子准教授）からそれぞれ報告があった。内容は、川上氏の報告と重なる部分も多いので、詳細は省略するが、ポイント（当然のことに見えて、その醸成はやはり難しいが）は、F D を、学生への教育のハウツーの開拓・普及だけにとどまらず、教員の視野の拡大や関係の変化として捉えていること、日常的な会話、活発なグループメールやり取りが積み重なって、F D に関連し話題に出すと必ず返事が帰るといった空気が存在していること（社会学部）、同じ立場に立って日々の悩みを共有し合う雰囲気がある（キャリアデザイン学部）というその開かれた環境である。

これらの報告に対して、授業にもっと職員も関わらせるべきである、教職連携のとり方はいかにすべきか？などの意見・質問が投げかけられ活発になされた後、最後の討論において、職員が授業に関わる意義や、大学院生などピアサポータとしての人材発見・育成（言い換えれば、学生のボランティアと制度化の結合）は今後の大きな課題であること、G P A 及びオムニバス式授業に関連して、その評価基準の共有化、教員の評価権限と集団的な評価のルールとの（ギャップ）せめぎあいについてどう調整するのが望ましいのか、といった論点が挙げられた。こうした論点に限るまでもなく、国立大・私立大間の違いを超え、抱える課題は共通のものも多く、関係者間の地道（しかし継続的）な対話・協力が必要であると感じた。

(文責：評価システム研究部門 渡辺 達雄)